下町文化

NO. 283
2018.9.28

発行
江東区地域振興部
文化観光課文化財係
〒135-8383
江東区東陽4-11-28
TEL(03)3647-9819
http://www.city.koto.lg.jp/

平成30年度　文化財保護強調月間

歴史と文化を考えよう

広重　「名所江戸百景　深川十万坪」
（国立国会図書館デジタルコレクション）

○平成30年度　文化財保護強調月間
歴史と文化を考えよう
・民俗芸能大会・文化財講演会
・東京9区文化財古民家めぐり
・江東区伝統工芸展
○明治期の旧大名家邸宅
～土屋家下屋敷と清水かつら～
○絵図に見る竪川周辺
元佐倉道とは
○江東の古道をゆく⑥
閻魔堂橋・黒亀橋・富岡橋とその道筋
○江東歴史紀行
深川六間堀の痕跡

今年も強調月間の季節がきました

日に日に深まる秋。秋の日は釣瓶落としとは、よく言ったものです。いつの間にか日が暮れるのは少々寂しいものですが、暑い夏を乗り越え、ようやく気持ちのよい季節になりました。スポーツ、読書、食欲など、この季節を形容する言葉は多く、何をしても楽しめそうですが、もう一つ「文化の秋」という言葉があります。文化財係では、文化を身近に感じていただくため、区内に伝えられた「さまざまな技」を一挙公開し、江東区の歴史と文化を体感していただければと思っております。

貯木場であった木場や佐賀町などの倉庫街、富岡八幡宮の祭礼や砂町の農村地帯と、それぞれの場を舞台に芸能化した民俗芸能の公開、伝統的な技術を基礎にモノ作りに携わる職人が、その技術を公開する伝統工芸展、さらには区の歴史などについて知ることができる文化財講演会など、その内容は多岐にわたります。また、東京文化財ウィークの一環として、都内9区による古民家めぐりが行われます。江東区は、南砂にある旧大石家住宅が対象となりますが、東京区政会館（千代田区飯田橋）では展示も行われます。

詳細は2・3頁をご覧ください。皆様のご来場をお待ちしております。

民俗芸能大会

10月21日(日)
会場　都立木場公園

【午前11時～12時30分】
場所　木場公園内入口広場

木場の角乗　東京木場角乗保存会

江戸時代、木場の筏師（川並）は、鳶口一つで材木を筏に組んでいました。角乗は、その仕事の余技として生まれました。

【午後1時～3時50分】
場所　木場公園内ふれあい広場

木場の木遣　木場木遣保存会

木場の川並衆が材木を操る時、お互いの息を合わせるため、歌われた労働歌です。

木場の木遣念仏　木場木遣保存会

木場に伝えられたもので、大数珠を手繰りながら念仏を唱える大変珍しいものです。

砂村囃子　砂村囃子睦会

江戸時代中期に金町の香取明神社（現葛飾区葛西神社）の神官が百姓に教えた祭囃子の流れを汲むお囃子です。

富岡八幡の手古舞　富岡八幡の手古舞保存会

富岡八幡宮の祭礼で神輿の先頭に立ち、木遣を歌いながら、男髷に裁着袴という粋ないでたちで練り歩きます。昔は、辰巳芸者が行いました。

深川の力持　深川力持睦会

江戸時代から倉庫地帯であった佐賀辺りで、米俵や酒樽などの運搬をする人々の余技として芸能化しました。

文化財講演会

入場無料

「ガラス原板写真にみる150年前の日本の風景（仮）」

オーストリア共和国に現存する明治維新期の日本で撮影もしくは収集されたガラス原板の調査（デジタル撮影）が、東京大学史料編纂所「古写真研究プロジェクト」によって平成22年以降、7回にわたって行われました。そのなかには、洲崎神社や亀戸天神社など江東区域のものも含まれます。同プロジェクト代表である保谷徹氏（東京大学史料編纂所所長）に、ガラス原板の画像データ（プロジェクター）を使ってお話ししていただきます。

日時　11月14日（水）
午後6時30分～8時30分

会場　江東区教育センター1階
大研修室（江東区東陽2-3-6）

定員　150人（先着順）

東京文化財ウィーク2018

「東京9区文化財古民家めぐり」

期間　10月1日（月）～11月30日（金）

都内9区（足立・板橋・江戸川・北・江東・杉並・世田谷・練馬・目黒）が参加して、文化財となっている古民家を紹介します。東京区政会館（千代田区飯田橋3-5-1）1階では、10月4日（木）～11月8日（木）の期間に「古民家復元」と題した展示を行います。

江東区内には、江戸時代の民家建築である旧大石家住宅が、仙台堀川公園内（南砂5-24地先）に保存されています。

開館日　土曜日・日曜日・祝日

開館時間　午前10時から午後4時

会場
- 都立木場公園（木場4丁目）入口広場・ふれあい広場

交通
- 東京メトロ東西線「木場駅」下車徒歩5分
- 都営地下鉄大江戸線「清澄白河駅」・都営地下鉄新宿線「菊川駅」下車徒歩15分
- 都営バス 業10〔とうきょうスカイツリー駅前～新橋〕木場4丁目下車

無形文化財公開事業

江東区伝統工芸展

入場無料

日時　11月1日(木)～11月4日(日)　午前9時30分～午後5時
※最終日は午後4時まで

会場　深川江戸資料館　地階レクホール(江東区白河1-3-28)

本展では、伝統工芸の技を受け継ぐ区無形文化財保持者による実演・体験を行います(左日程表参照)。今回の特集は更紗染(佐野利夫・佐野勇二)です。ぜひご観覧ください。

伝統工芸品即売(会期中)

会場内で、江東区伝統工芸保存会による工芸品の即売が行われます。またとない機会ですので、是非どうぞ。

技の体験(実費がかかります)

①午前10時～正午
②午後1時～午後3時

左日程表のうち、　　の技術で体験ができます。申込は会場で直接職人さんに申し出てください。

実演公開日程表

日程	技術「体験内容」		保持者
11/1(木)	あめ細工		青木　喜
	紋章上絵		石合信也
	刀剣研磨		臼木良彦
	江戸切子	「小皿 費用1,000円」	小林淑郎
	無地染	「絞り染め 費用2,000円」	近藤良治
	更紗染		佐野利夫 佐野勇二
	帯製作		杉浦正雄
11/2(金)	あめ細工		青木　喜
	べっ甲細工	「イヤリング 費用2,000円」	磯貝　實
	表具	「一閑張 費用1,000円」	岩崎　晃
	更紗染	「東海道五十三次額絵・蒲原 費用2,500円」	佐野利夫 佐野勇二
	襖帽・襖椽		鈴木延坦
	相撲呼出し裁着袴製作		富永　皓
	建具	「組子コースター費用 1,000円・1,500円・2,500円」	友國三郎
11/3(土・祝)	あめ細工		青木　喜
	紋章上絵		亀山晴男
	鍛金	「まいご札 費用1,000円」	佐生明義
	更紗染	「東海道五十三次額絵・蒲原 費用2,500円」	佐野利夫 佐野勇二
	すだれ製作	「手編み 費用500円」	豊田　勇
	染色補正		丸田常廣
	茶の湯指物	「箸費用1,000円／小箱費用1,500円」	山田一彦
11/4(日)	あめ細工		青木　喜
	表具	「一閑張 費用1,000円」	岩崎　晃
	刀剣研磨		臼木良彦
	更紗染	「東海道五十三次額絵・蒲原 費用2,500円」	佐野利夫 佐野勇二
	茶の湯指物	「箸費用1,000円／小箱費用1,500円」	山田一彦
	手描友禅		和田宣明
	木彫刻	「根付費用500円～2,000円」	渡邉美憲

(順不同・敬称略)

※都合により変更する場合もあります。ご了承ください。
　　の技術は体験ができます。申込みは当日会場で。

深川江戸資料館 ー案内図ー

会場・深川江戸資料館への交通

●東京メトロ半蔵門線・都営地下鉄大江戸線
「清澄白河」駅下車　A3出口　徒歩3分
●都営バス門33系統「清澄庭園前」下車　徒歩3分
●都営バス秋26系統「清澄白河駅」下車　徒歩4分

明治期の旧大名家邸宅

～土屋家下屋敷と清水かつら～

江戸時代の江東区域には、全国各地の大名屋敷が所在していたことはよく知られています。明治初年、政府によって居住の屋敷を除いて上地されますが、江東区域を居住地に選んだ「殿様」も何人か確認できます。例えば、安政開港期の外国との交渉に携わった老中堀田正睦の子である正倫は、明治五年（一八七二）に深川佐賀町に転居します。これは、麻布笄町にあった屋敷が開拓使官園として上地された代地として深川佐賀町の屋敷が与えられたことによるものでした。正倫は明治二三年に佐倉へ移るまで、深川邸に居住します。

正倫と同じように深川に住んだ殿様の一人に、旧土浦藩主の土屋挙直（しげなお）がいました。堀田家とは異なり、土屋家は一七世紀には小名木川北岸に屋敷を拝領しています。そして、文久三年（一八六三）に神田小川町にあった上屋敷が幕府の洋式歩兵部隊の屯所として設定されたため、小名木川の下屋敷を居屋敷としています。挙直は、嘉永五年（一八五二）に水戸藩主徳川斉昭の一七男として江戸小石川邸にて誕生します。のちに土浦藩主土屋寅直（ともなお）の養子となり、明治元年に養父寅直隠居にともなって土屋家の家督を相続しました。明治四年の廃藩置県の時には、小名木川の屋敷も一部収公されますが、残りは引き続き自分の居宅として使っていました。

挙直は明治六年、東京府第六大区四・五小区の小学校新築に際して、金二万円を寄付しており、それをうけてこの小学校は土屋学校と命名されました（現深川小学校）。それ以外にも深川区役所の新築費用など、自分の居住していた深川区に対して援助を行っていたことが確認できます。挙直は、同九年にアメリカで行われたフィラデルフィア博覧会の御用掛として徳川昭武に随行し、帰国後は内務省勧農局の御用掛として新宿試験所や下総牧草場などに勤務しました。同一四年に官を辞して、旧藩領である信太郡大形村の土地を拝借し、旧藩士の授産事業として開墾会社樹藝社も設立しますが、同二五年に四一歳の若さで亡くなります。ちなみに、国文学研究資料館に所蔵されている常陸国土浦土屋家文書によれば、土屋家は明治四一年（一九〇八）に深川区富川町三番地の小名木川屋敷を売却し、豊多摩郡千駄ヶ谷町穏田（現渋谷区）に転居しています。

土屋家邸東端の現況（森下5丁目）

殿様が住むとなれば、当然旧藩士たちの何人かは家令や家扶など、殿様の家に住み込んで働く人もいます。旧藩士清水貞之助の長男桂は明治三一年に深川で生まれますが、これが「靴が鳴る」や「みどりのそよ風」などで知られる童謡作家「清水かつら」です。別府明雄『あしたに　童謡詩人清水かつら』（郁朋社　二〇〇五）によれば、かつらが生まれ育った家宅は「庭に魚取りの投網を打てるほどの池もあり、深川名物とも言われた大きな松の木がある広大な屋敷であった」と紹介されています。『靴が鳴る　清水かつら童謡詩集』（ネット武蔵野　二〇〇八）では、清水家がこのような大きな邸宅を持っているわけもなく伝聞に過ぎないと評していますが、おそらく殿様である土屋家の屋敷のことを指していると思われます。四歳の時に両親が離縁したため本郷区へ引っ越し、関東大震災の後、父の再婚相手の実家のある埼玉県北足立郡新倉村（現和光市）へ避難、その後白子村へ転居して昭和二六年（一九五一）に五一歳で亡くなるまで住んでいました。

白子橋の「靴が鳴る」歌詞レリーフ
（和光市白子）

明治初年の江東区域の土地利用については、まだまだ分からないことが多いのですが、今回は旧大名家の邸宅があり、旧藩士とともに生活をしていた痕跡をたどってみました。

（深川東京モダン館　副館長　龍澤　潤）

絵図に見る竪川周辺

元佐倉道とは

江戸時代、佐倉道というと一般的には「水戸佐倉道」にはじまります。この道は、日本橋から北へ向かい最初の宿場千住宿で日光街道と分かれ、水戸街道とともに北東へ向かって進むため、このように呼ばれたと考えられます。そして、次の宿場新宿（葛飾区）で水戸街道から南東方向に分かれ佐倉道となり、市川・八幡を経て下総国佐倉（千葉県佐倉市）に向かいました。

しかし、江戸時代にはこれとは別に「元佐倉道」と呼ばれた道がありました。明治8年（1875）に名称が千葉街道と改められたこの道は、竪川に沿って、その北岸を東西に走り、中川を逆井の渡しで西小松川（江戸川区）へ渡り小岩へ通じる道です。推測するに、新宿経由で佐倉に向かう水戸佐倉道が江戸時代中期以降に佐倉道として定着すると元佐倉道と呼ばれるようになったと思われます。すなわち、それ以前は元佐倉道が房総方面に向かう主たる街道として利用されていたと考えられます。

そこで、絵図に描かれた元佐倉道およびその周辺の様子を中心に、元佐倉道や竪川に関する若干の考察を加えてみたいと思います。

17世紀後半の「さくらミち」

まず、延宝8年（1680）に江戸をいくつかに分割して描いた『江戸方角安見図』（国立国会図書館蔵）を見てみたいと思います。

直ぐ南を走る竪川は、万治2年（1659）に幕府の命を受けた本所奉行の徳山五兵衛と山崎四郎左衛門によって開削された川で、絵図はその21年後に成立したということになります。そのためか、「亀井戸」（亀戸）の項には「新川五ツメ橋通り」「新川六つめはし」と「新川」の記述が見られます。

この「新川」の表現は、川の名称とは限らず、「新しい川」程度の意味合いかもしれませんが、絵図を見る限り、当時「竪川」の名が付されていたことは確認できません。

また、川沿いを中川方面（東方向）に向かうと「総州　さくら海道」「しもおさ　さくらミち」（図1）との記述が見えることから、17世紀後半のこの道は元佐倉道ではなく、佐倉道であったことがわかります。しかも、「五ツメはし」（五の橋）を挟んだ川の両側には、「日本橋より一里塚」との記述も見え、当時、下総佐倉方面への主要道であったことを窺わせます。

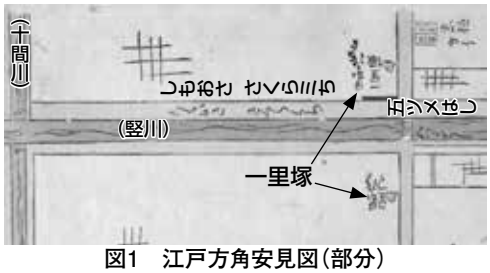

図1　江戸方角安見図（部分）

ちなみに、両国橋で隅田川を東に渡ると、そのやや南に流れる竪川には「一ツめのはし」（一の橋）が架けられ、中川方面（東方向）に向かって順次「六ツめのはし」（六の橋）まで架けられています。興味深いのは、そのうちの「四ツめのはし」（四の橋）と「五ツメはし」（五の橋）の間を南北に流れる十間川（横十間川）を挟んで、竪川両岸の景観が大きく異なることです。

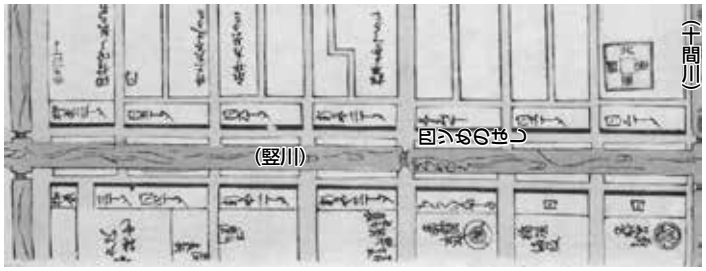

図2　江戸方角安見図（部分）

四つめ橋と五つめ橋の間

両橋の間を流れる十間川は、図1では西側に、図2では東側に描かれています。二つの図はこの川で分けて描かれていますが、いうまでもなく連続したものです。

そこで、両図を見ると、同河川の西側を描いた図2は十間川まで町場が展開し、東側を描いた図1は若干の武家地があるものの、町場は見られず亀戸村の様相を呈しています。

開削後、わずか20年余のこの時期、十間川を境にすでにその景観には大きな違いが生まれていたことがわかります。しかも、佐倉道を記した「総州さくら海道」「しもおさ　さくらミち」のいずれの記述も十間川の東側であり、西側には見られません。

この絵図を見る限り、十間川を境に、町場と村という異なる空間が竪川（佐倉道）両岸に存在したということになります。

江戸時代後期、文政11年（1828）成立の『新編武蔵風土記稿』には、亀戸村の項に「村の南寄竪川に邊せる往来を元佐倉道と云」との記述があり、村では「元佐倉道」との認識を持っていたことがわかります。

江戸中期以降、水戸佐倉道が成立したことで「元」が付いたとすれば、いつ頃からなのか。佐倉道への興味は尽きません。

（文化財主任専門員　出口宏幸）

江東の古道をゆく⑥
閻魔堂橋・黒亀橋・富岡橋とその道筋

今回は、油堀に架けられていた閻魔堂橋・黒亀橋・富岡橋に注目しながら、三つの橋を通る道筋の変遷を追いかけてみます。

「閻魔堂橋」で知られた富岡橋

歌舞伎の舞台として有名な閻魔堂橋の本銘が富岡橋であることは、すでに本誌278号で触れました。その位置は図1の「本所深川絵図」（嘉永5年・1852）で確認できます。

富岡橋北側の道（①）は、寺町を通って仙台堀の海辺橋に至り、霊巌寺を通り過ぎて小名木川の高橋を渡れば森下を経て竪川の二之橋へと至ります。一方、南側の道（②）は一色町と黒江町の間を通り、奥川橋を渡って奥川町に至り、堀割に沿って行けば永代橋へとつながります。このように富岡橋の道筋は深川を縦断する幹線道でした。

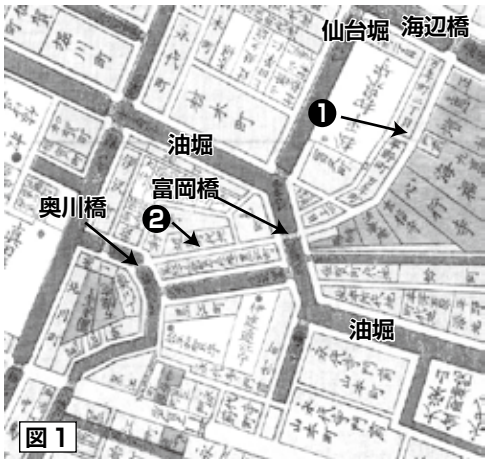

図1

図1から180年ほど前の様子を描いた図2「深川総画図」（万治元年・1658～天和2年・1682）を見ると寺町の前を通る道（①）が見えます。この道が図1に見える富岡橋より北方向の道にあたります。寺町の寺院のうち増林寺・海福寺は寛永5年（1628）の創建であり、またこの道の南に位置する富岡八幡宮の創建が寛永4年であることから、道は寛永4年頃にはすでに存在していたと考えられます。

寛永18年（1641）、この道と深川猟師町（寛永6年成立）とに挟まれた地に木置場が設けられました。図2の道（①）の西側に広がる碁盤の目のような堀割は木置場の入堀です。元禄12年（1699）、木置場の地は幕府に召し上げられ、町場化して元木場と呼ばれます。木置場は一時猿江に移転後、元禄14年に現在の木場公園の辺りへと移りました。この結果、木材運搬の必要上から、木場と隅田川とを接続するために元木場の入堀を活かして仙台堀と油堀が開削されました（詳細は本誌281号「絵図から読み解く元木場の景観」）。

図2

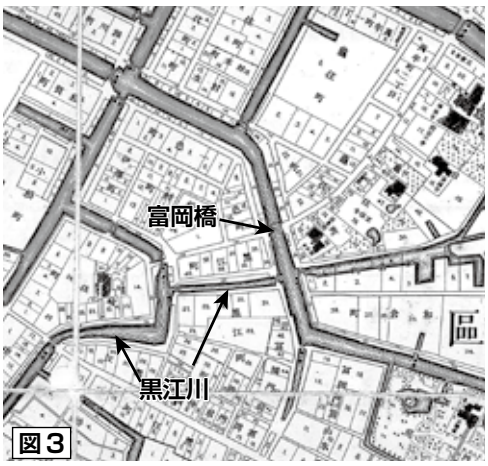

図3

開削により仙台堀と油堀は道（①）と交差します。仙台堀との交差地点にあたる海辺橋は元禄末に幕府によって架けられたとの言い伝えがあることから（「町方書上」）、元禄12年の仙台堀開削の際に架けられたと思われます。そうなると油堀開削と道の延伸にともない、富岡橋も同じ頃に幕府によって架けられたと考えられます。

明治に入り、富岡橋は明治6年（1873）7月に架け替えられますが（木橋）、明治19年の図3「東京実測全図 七幀」（国立国会図書館所蔵）を見ても橋の位置や道筋は江戸時代とほぼ変わっていないことが分かります。

東京市区改正と黒亀橋

図4の国土地理院発行の一万分の一地形図「日本橋」（明治43年・1910）を見ると、富岡橋は撤去され、その東南側に黒亀橋が新設されています。

黒亀橋から北方向の道（①）は寺町の一部に新設して江戸時代以来の道へ合流しています。一方の南方向の道（②）は、黒江川埋め立て地をまっすぐに伸びて、黒江川に架かっていた八

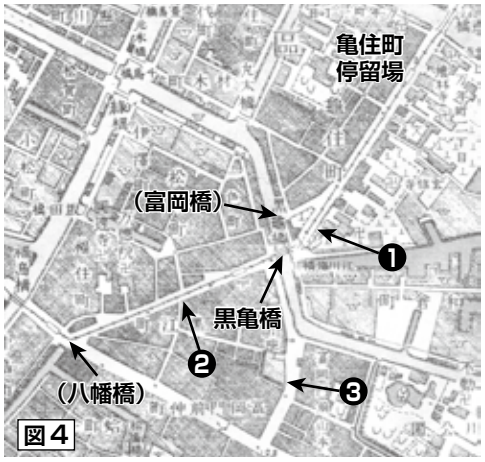

図4

幡橋の跡地辺りで現在の永代通りにあたる富岡門前仲町通りに接続しています。

この道筋は、明治22年5月20日告示の東京市区改正設計により「深川八幡橋際埋立地ヨリ富岡橋東新架橋及海辺橋高橋ヲ経テ二ノ橋通リ番場町大川端ニ至ルノ路線」として計画された第三等道路で、在来道を西側へ拡げて10間幅となりました。明治32年8月には黒江町―亀住町間の仮橋新設が予定され、後に事業速成のために計画縮小された明治36年3月31日告示の新設計では「深川福住町第二等線ヨリ黒亀橋海辺橋及高橋ヲ経テ二ノ橋通リ番場町ニ至リ左折シテ厩橋外ニ至ルノ路線」とあるので、新設計告示までには黒亀橋が架けられたとみられます。明治34年5月に富岡橋が撤去されていることから、深川を縦断する幹線道の役割は黒亀橋道筋が担うこととなりました。

明治37年5月には、江東区域最初の路面電車である東京市街鉄道の茅場町―亀住町間が開業し、亀住町より北方向は明治41年6月に開通しています。

また、市区改正事業では富岡門前山本町西側の入堀を埋め立てて、黒亀橋から油堀に沿って富岡門前仲町通りに至る幅10間の道も設けられました(③)。

市区改正にともなう道筋の変更と路面電車の開通は、東京中心部との連絡を容易にし、深川南部の発展を促したものといえるでしょう。

震災復興と富岡橋

大正12年(1923)9月1日に発生した関東大震災後の復興計画により道の様子は大きく変わります。図5は大正14、15年に議決された換地位置決定図です(第58地区と第59地区を合成。『帝都復興区劃整理誌』第三編各説第四巻、東京市役所、昭和7年)。道のうち斜線部分は在来道の道敷で、黒塗り部分は新設・拡幅した所です。

黒亀橋道筋(図4①②の在来電車通り)は、復興道路の幹線街路第10号線と第27号線とに分割されました。

第10号線は江東通りと呼ばれ(現清澄通り)、大島川(現大横川)の黒船橋より門前仲町を経て亀住町に至り在来電車通りと合流して海辺橋方向へ行く道です。黒船橋から亀住町までは幅33m、亀住町から海辺橋までは幅25mとされ、黒船橋から油堀川に新設された富岡橋までは在来道を両側に拡げ、富岡橋から在来電車通りへの合流点までは新設、それより北は西側に拡げられています。新設部にあたる寺町はさらに東へと移動することになりました。

一方の第27号線は福砂通りと呼ばれ(現葛西橋通り)、幹線第3号線(現永代通り)から東北へ分かれ、黒亀橋までは在来電車通りを北側へ拡げ、黒亀橋以東は新設された幅22mの道です。

焼失した黒亀橋は昭和2年(1927)11月(左絵葉書、個人蔵)、新設の富岡橋は昭和4年3月に竣工しました。昭和5年3月1日には、黒亀橋を通っていた市電の軌道が富岡橋を経て門前仲町へと至るルートへ変更されました。これにより深川を縦断する幹線道の役割は富岡橋を通る第10号線が担うこととなり、黒亀橋を通る第27号線は深川東部や砂町と永代橋を連絡する道となったのです。

図5

油堀川埋め立て

昭和49～52年度にかけて油堀川は埋め立てられます。下の写真は昭和49年4月に富岡橋を北方向に撮影したものです。中央奥に見える大きな建物は深川住宅(深川1)で、その左側に小さく黒亀橋が写っています。

埋め立てにより二つの橋は無くなりましたが、油堀川公園内に保存されている富岡橋の親柱が震災復興の名残をとどめています。

図6

(文化財主任専門員　栗原　修)

江東歴史紀行

深川六間堀の痕跡

【1955年の写真】

この夏、中川船番所資料館で開催した企画展「古写真に見る江東の昭和」で、［図1］のような写真を展示しました。撮影されたのは昭和30年（1955）頃。左右に走る道路、その周囲は埋め立てられたばかりの土地のようで、瓦礫（がれき）が散乱しています。

［図1］北之橋

この場所は新大橋通り、森下1丁目と新大橋3丁目の境にあたります。この場所の現在のようすをとらえたのが［図2］で、やや道路が盛り上がっています。

この「盛り上がり」は北之橋という橋の跡で、この下を六間堀が流れていました。

［図2］図1の現在

【六間堀】

六間堀は、大変古い運河です。すぐ西側の隅田川沿岸の蛇行と平行していることを考えると、この川のあたりまでが陸と沼・池が入り混じっていたので、隅田川沿岸を整備したときに埋め残して運河にしたのではないかと考えられます。

江戸幕府がまとめた『（江戸）町方書上』（文政11年　1828）の「深川六間堀町」には、六間堀町は慶長元年（1596）に開発された深川村の「分郷六間堀」として成立したと伝え、江戸初頭にはすでに六間堀の名があったことがわかります。さらに六間堀は、川幅6間（約10・8m）で竪川（たてかわ）から小名木川へ流れ、開削の年代は不明となっています。

小名木川は家康の江戸入府と同時期に開削された運河ですが、竪川は明暦の大火後に開かれた運河なので、六間堀が開かれた頃はなかったことになります。初めから竪川と小名木川を結ぶ運河だったのではなく、小名木川の支流として船の繋留場所としての役割を担っていたのではないでしょうか。

【北之橋】

六間堀には山城橋・北之橋・中之橋・猿子橋といった橋が架かっていました。『町方書上』には六間堀町の北側に架かり、本所から新大橋の方へ通行する場所に架かっている、と記しています。残念ながら架橋年代は不明です。［図3］は江戸時代の六間堀と北之橋の位置を示しています。橋を通る道路が、現在の新大橋通りに発展しました。

［図3］『本所深川絵図』（文久2　1862年）○印 北之橋

【埋め立てられた六間堀】

もう一度［図1］を。この川が埋め立てられたのは、太平洋戦争の空襲で破壊された街に広がる瓦礫を処理するために、この六間堀が利用され、埋め立てられ、昭和26年（1951）に埋め立てが完了しました。［図1］ではもとは川沿いに等間隔に設置されていた柵の柱を、橋の下の埋立てを囲むように移設して、人が立ち入らないように配慮しています。

堀に架かっていた橋の跡は、どこも盛り上がっており、その痕跡をとどめています。川だったところは住宅の家並みに、また新大橋3丁目から墨田区にかけての住宅地には、かつての護岸が露出しているところがあり、川の存在を伝えています。

【戦争の痕跡】

六間堀は決して大きな運河ではありません。しかし小名木川や後に開かれた竪川の通船が順調であるようにと、その繋留や一時的な荷揚げ（河岸の機能）、混雑時の船の退避などを見込んで開かれ、関東全域につながる小名木川の水運を支えていました。

太平洋戦争の時代も水運は物資輸送の主体でしたが、戦災による大量の瓦礫処理のため埋め立てられました。［図1］は戦後10年たった頃に残る、戦争の痕跡でもあります。

（中川船番所資料館　久染健夫）